『タイム』誌にみる、ラフマニノフと音楽ビジネス
――1943-1948 年を中心に

安原雅之　愛知県立芸術大学音楽学部准教授（音楽学）

Sergei Vasilievich Rakhmaninov（1873-1943）は、作曲、ピアノ、指揮、という 3 つの領域において、20 世紀前半に活躍したロシア出身の音楽家である。彼の音楽は、没後 70 年を迎えた今もなお広く愛されているが、しかし、作曲家としてのラフマニノフの業績は、かならずしも常に高く評価されているわけではない。たとえば、ラフマニノフの作風については、やや控えめな見解でも「19 世紀的な調性や形式の慣習を放棄することなく、生涯を通じて、20 世紀音楽の発展における主流から隔絶したままであり続けた」（Morgan 1991: 111-112）と言われ、よりストレートなコメントでは「ある者は、彼の音楽を“古くさいもの”として見捨てる」（Grout 2014: 800）などと否定的に語られる。これは、換言すれば、一般の音楽愛好家には愛されるが、学術的な視点からの評価は必ずしも高くない、ということであり、そのような二重の価値観が併存しているのが、ラフマニノフをめぐる今日的状況であると言えよう。

本稿は、ラフマニノフの作品が「現代の音楽生活において重要なファクター」（Morgan 1991: 112）となるプロセス、つまり、学術的な控えめの評価とは裏腹に、ラフマニノフの作品が絶大なポピュラリティを獲得していくプロセスの一面を、アメリカのニュース雑誌である『タイム　*Time*』誌の記事から読み取ることを目的としている。1923 年に創刊されたこの雑誌には、音楽関係の記事も数多く含まれており、音楽自体についての深い議論は期待できないが、アメリカにおける音楽の動向を把握するためには適切な媒体のひとつであると考えられる。また、1943 年から 1948 年という時期は、作曲家が亡くなった年からの 6 年間である。それは、彼のイコン（偶像）が形成される初期段階にあたり、また、第二次世界大戦中から終戦を経て、冷戦の時代に突入していくという激動の時期でもある。そのような、社会における音楽のあり方が大きく変化する社会的状況のなかで、『タイム』誌がどのようにラフマニノフを捉えたのか、一連の記事から考察したい。

1.「ラフマニノフ、死す」——そして、第二次世界大戦の終戦まで

1943 年 4 月 5 日に発行された『タイム』誌で、同年 3 月 28 日に亡くなったラフマニノフの、次のような死亡記事が掲載されている。

> 没。セルゲイ・ヴァシリエヴィチ・ラフマニノフ、69 才。世界的に有名なピアニストであり、同世代のなかでも指折りの、偉大な作曲家。肺炎と肋膜炎の合併症で、ビヴァリー・ヒルズ（カリフォルニア）の自宅にて死す。
>
> 貴族階級出身の音楽家であり、古い世界の慣習と保守的な趣味を以て、彼は 3 つのオペラ、 3 つの交響曲、 4 つのピアノ協奏曲、しばしば演奏される数多くの歌曲とピアノ作品を残した。いたるところで演奏された嬰ハ短調の前奏曲…は、最も良く知られている。
>
> スマートで背の高いセルゲイ・ラフマニノフは、ロシアの帝国警備隊長の息子として生まれた。彼は、偉大なる故ピョートル・イリイチ・チャイコフスキーの友人であり、後継者でもあった。指揮者としては、ロンドン・フィルハーモニックと、モスクワのボリショイ劇場で、名声を勝ち得た。また、1909 年のアメリカ演奏旅行で、ピアニストと作曲家という二重の役割で喝采を浴びた。ソヴィエトの革命に屈することのない敵として、1917 年にロシアを離れ、その後の人生のほとんどをマンハッタン［ニューヨーク］で過ごした。（Time 1943.04.05）

この記事のなかで、ラフマニノフが「ソヴィエトの革命に屈することにない敵」と言及されていることは興味深い。ラフマニノフは、1931 年に『ニューヨーク・タイムス』紙に掲載されたソヴィエト政権に対する抗議文に署名しているのだが、そのことは後に非常に大きな意味を持つようになっていた。つまり、その署名は、ソヴィエトに対する抗議としてよりもむしろ、反社会主義者としての彼自身を代弁するものとなった。すなわち、ラフマニノフは、当時のアメリカにおいてイデオロギー的に正しい人間であることの裏付けとなったのである。第二次世界大戦において、アメリカとソヴィエトは最終的には勝利を分か

ち合ったが、東欧における社会主義政権の樹立をめざすソヴィエトと、「自由と民主主義」の理念を掲げるアメリカは、1943 年当時すでに、戦後にはじまる冷戦時代の伏線となる状況を形成していた。そのような中で、ラフマニノフがイデオロギー的に問題のないロシア人であることが確認されていることが、このフレーズから読み取れる。

このあと、第二次世界大戦終焉までの期間にラフマニノフが言及される記事では、「ピアノの調律は、戦時下において重要な産業ではない」(Time1944.07.10) といった風に、戦時中であることを思い起こさせるような記述が端々にあるものの、そのような状況の中でも通常の音楽生活が営まれ、ラフマニノフの音楽が聴かれていることがわかる。たとえば、カリフォルニアのサン・クエンティン州立刑務所ではラフマニノフの前奏曲が「サン・クエンティン・オーケストラのスタイルで」演奏されたことや（Time 1944.02.07）、シカゴの教会では、イースターの際にラフマニノフの作品が演奏されたことが報じられている（Time 1945.04.02）。新譜欄では、ラフマニノフの交響曲第２番ホ短調（ニューヨーク・フィルハーモニック管弦楽団、アルトゥール・ロジンスキ指揮。コロンビア、12 面）が、「静寂な緩徐楽章を除いて、ロジンスキの扱いは重々しい。演奏：まあまあ。録音：良し。」と紹介されている（Time 1945.06.04）。また、ピアノ協奏曲第 4 番（フィラデルフィア管弦楽団、ユージン・オーマンディ指揮、作曲者による独奏。ビクター、8 面）について、「ピアノ協奏曲第 4 番を作曲する頃には、作曲家としての力量は衰えていたが、ピアニストとしての才能は活力を保っていた。演奏：大変すばらしい。録音：良い。」(Time 1944.10.02) と評されていることが興味深い。

２．戦後のラフマニノフ・ブーム

第二次世界大戦が終わり、ラフマニノフが言及される最初の記事が掲載されたのは、作曲家プロコフィエフの肖像画が表紙を飾った刊であった。ここに掲載されている長い記事は、モスクワ音楽院大ホールで行われた演奏会のリポートから始まる。その演奏会は、ドイツ軍を撃退した攻防戦をたたえるスピーチの後、燕尾服に白いネクタイを身にまとったプロコフィエフが自作の交響曲第

５番を指揮した。そして、彼が、一度は亡命するも、スターリンによる粛清の時期に帰国したこと、そしてソヴィエトを代表する作曲家になったという、その後の変遷を詳しく説明している。ラフマニノフについては、革命時にロシアを離れ、その後帰国することはなかった人物であることが指摘されている。

1946 年になると、ラフマニノフのピアノ協奏曲第２番がブームを迎えるのだが、夏にはその予兆とも思える２つの記事がある。まず、ラジオ放送のプレヴューで、マサチューセッツ州のバークシャー音楽祭のコンサートの録音が放送されることが告知されている。そこでは、S. クーセヴィツキーの指揮、ボストン交響楽団、ユージン・リストの独奏で、ラフマニノフのピアノ協奏曲第２番ハ短調とラヴェルの〈ダフニスとクロエ〉第２組曲が演奏される（Time 1946.07.22）。また、新譜欄では、同じくユージン・リスト独奏、アルフレッド・ウォーレンスタイン指揮によるとロサンゼルス・フィルハーモニック管弦楽団によるラフマニノフのピアノ協奏曲第２番ハ短調（デッカ、10 面）が紹介され、「聴き古されたチャイコフスキーの協奏曲に取って代わる勢いの曲が、トルーマン大統領がお気に入りのピアニストによって演奏されている。また、作曲者自身（故）によるビクターの録音（1929 年）は定番となっている。演奏：良い。」（Time 1946.04.08）と評されている。

それから５ヶ月後の「そして今、それはラフマニノフだった」（Time 1946.09.16）というフレーズではじまる記事は、ラフマニノフのピアノ協奏曲第２番が大ブレイクしたことを、次のように報じている。

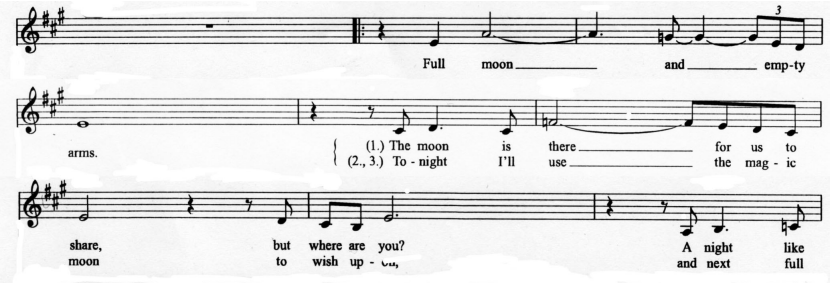
> 映画、ジュークボックス、そしてラジオは、まずチャイコフスキーの作品を、そして次にショパンの作品を取り上げた。それらは、たわいもない言葉をつけられて、ブギウギのビートから豪華なオーケストラ版まで、あらゆる手がほどこされた。チャイコフスキーの［交響曲］第５番で最も魅力的な旋律が、最も陳腐なものとなり、いつもラジオを聴いている人なら、〈Our Love〉のイメージを払拭せずに〈ロメオとジュリエット〉を聴くことはできない [1]。

先週、全米のアメリカ市民で、ラフマニノフのピアノ協奏曲第２番を１度も聴かずに過ごした人は、ほとんどいないだろう。〈Full Moon and Empty Arms［邦題：寂しい私］〉という名の甘ったるい版は７種類の録音があり、それらはジュークボックスの稼ぎ頭となっている。［ピアノ協奏曲第２番の］主題は、現在上演中の２つの映画（ハリウッドの〈Holiday in Mexico（メキシコでの休暇）〉と英国の〈Brief Encounter [邦題：逢びき]〉）で、鳴り続けている。そして先週、リパブリック社の映画〈I've Always Loved You（私はずっとあなたを愛していた）〉が加わり、そのような映画は３本になった。

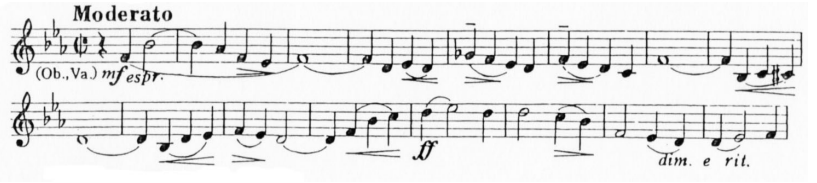
ビクター・レコーズ社は、〈A Song to Remember［邦題：楽聖ショパン］[2]〉のおかげでショパンの売り上げが劇的に増加したことを思い出し、協奏曲の４つの版を同時に発売した。それらは、アルトゥール・ルービンシュタインと NBC 交響楽団による決定版から、チャイコフスキーも手がけたフレディー・マーティン[3]による甘いフォックストロット版までを含んでいる。

すでに、ラフマニノフを賛美する人たちは、この協奏曲について、亡くなった作曲家／ピアニスト自身が彼の嬰ハ単調の前奏曲について感じていたのと同じように、感じていている。ラフマニノフは「彼らは、彼らが選んだいかような方法で弾いても構わない、私に聞こえるところで弾かない限りはね！」と言いはねたのだ。（Time 1946.09.16a）

このように、この記事は、やや皮肉を込めた筆で、ラフマニノフのピアノ協奏曲第２番がより大衆的なジャンルで大々的に扱われるようになったことを報じている。ここで言及されている〈Full Moon and Empty Arms〉については、後述する翌年の記事が解説しているが、これはフランク・シナトラ Frank Sinatra（1915-1998）が 1941 年に歌った〈I Think of You（わたしはあなたを想う）〉に続くもので、後者がピアノ協奏曲第２番の第１楽章の第２主題に基づくものであったのに対し、前者は、同第３楽章の第２主題を引用して作曲されたものである（譜例）。これは、複数のアーティストによるものが流通していたが、そのなかでも、シナトラによる録音が最も知られている。



ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第２番 第１楽章 第２主題



Full Moon and Empty Arms の冒頭部

また、この記事で言及されるハリウッドのコメディー映画〈Holiday in Mexico〉のシーンで、バスク出身のピアニスト、ホセ・イトゥルビ[4]が協奏曲の短縮版を演奏するほか、主役の[5]が〈I Think of You〉を歌っている。

この記事が掲載された『タイム』の同じ号の映画欄には、上記の記事で言及される映画〈I've Always Loved You〉が次のように紹介されている。

> 〈I've Always Loved You〉は、テクニカラー[6]と音楽による、もったいぶったソープ・オペラである。それは、通常はシンプルで労働者向きのホース・オペラ［安っぽい西部劇］で切り盛りしているスタジオが制作している。この映画では、ラフマニノフのピアノ協奏曲第２番のすばらしい演奏が何度も繰り返されており、ラフマニノフ愛好者を喜ばせるし、また、お涙頂戴が好きな映画好きにはたまらないだろう……長ったらしく、退

屈で、腹立たしいほどにこれといった動機のないストーリーは、ちゃんとした役者たち、有名なフランク・ボーゼイジ監督（Seventh Haven［邦題：第七天国］、Farewell to Arms［邦題：戦場よさらば］）、テクニカラー、そして豪華なセットを台無しにしている。お金を払う価値があるのは、アルトゥール・ルービンシュタインによるサウンド・トラックの、すばらしい演奏だけだろう。彼は、この演奏で 85000 ドルの報酬を得ているが、それは、音楽の世界では――いやハリウッドでも――法外な額であった。（Time 1946.09.16b）

ここで評価されているアルトゥール・ルービンシュタイン Artur Rubinstein（1887-1982）は、ポーランド出身のアメリカのピアニストであり、20 世紀を代表するピアニストのひとりである。彼は、第二次世界大戦の時期をアメリカで過ごしたが、1946 年にアメリカ市民権を得たのちに、勢力的な演奏活動を開始している。彼が得る報酬については、翌年の記事が次のように報じている。

1 コンサートにつき最低 3500 ドル以上という高額のギャラを要求するクラシックの演奏家は、ルービンシュタインしかいない。しかし、ルービンシュタインは投資に値する。たとえば昨年、ネブラスカ州のリンカーンで開催されたコンサートの、チケット売り上げのうちの彼の取り分は 5400 ドルであった。彼の、ラフマニノフのピアノ協奏曲第 2 番のレコードは、ビクターの、1946 年のクラシック・アルバム部門のベストセラーであった。また、彼は、映画〈I've Always Loved You〉のために 3 日間かけてピアノを演奏して 85000 ドルの収入を得ているが、それは、いまもハリウッドでの最高額の記録となっている。（Time 1947.05.26）

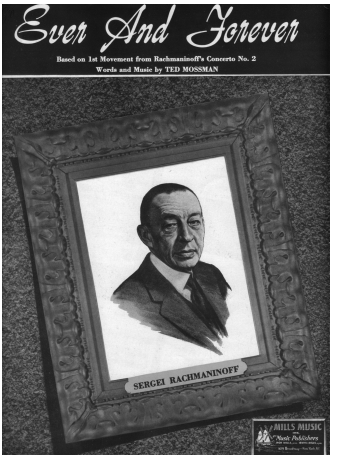
これら一連の記事からわかるのは、クラシックの名曲が大衆向けのエンタテイメント・ビジネスに取り込まれ、名曲が大衆化する一方、そこに名演奏家が関わることで、クラシック業界も隆盛をみることとなったことである。ラフマニノフがらみの諸々が、文化的にも、経済的にも、大規模な現象となっていっ

たとも言えよう。

少なくとも『タイム』誌の記事は、知識階級が中心であろう読者の指向を反映し、ポピュラー音楽に感化されたラフマニノフについては、やや冷たい視点で、しかし好奇心をかき立てるように書かれている。当時だれもが聴いたであろう〈Full Moos and Empty Arms〉については、次のようなに報じている。

> 自分が好きなクラシック音楽が、ダンス向けのバンドによってメッタ切りにされるのを聴いて、多くの音楽愛好家は、罪人をみつけてやりかった。しかし、多くのクラシック・ファンは、どこを探したら良いのかを知らない。その男は、テッド・モスマン[7]という名の、ティン・パン・アレー[8]の男である。(Time 1947.06.23)

これはつまり、ラフマニノフのピアノ協奏曲第2番を〈Full Moos and Empty Arms〉に仕立てたのは誰か、ということであるが、この記事によれば、その“作曲者”であるモスマンはイーストマン音楽学校の卒業生で、ガーシュイン風の曲をいくつか作曲しているが、創作活動の中心は歴史的な名作のアレンジであり、その数は400にもなる。ラフマニノフのピアノ協奏曲第2番については、第1楽章に基づく〈Ever and Forever(いつか、そして永遠に)〉に続いて、第3楽章の第2主題に基づく〈Full Moon and Empty Arms〉が制



〈Ever and Forever〉の表紙

作され、とりわけ後者が大ヒットして話題となったのである。

3．音楽のための『タイム』

1947 年 11 月 3 日に掲載された記事は、出版社から読者に宛てた手紙というかたちで、“ 音楽のための『タイム』Time for music” と呼ばれるデパート向けの展示物について報じている。「最近、あなたの町のデパートのショーウィンドウに飾られている “ タイム音楽クイズ ” をご覧になって不思議に思われた方もいらっしゃるかもしれません」という書き出しで、『タイム』が全国的に展開している音楽のプロモーションを説明している。

この記事によれば、音楽への興味、特にクラシック音楽への関心が高まりつつある状況を反映して、多くのデパートが音楽部門の売り場面積を拡張し、内容を充実させるようになってきた。その具体的な根拠として、昨年のレコードの総売り上げは 2 億 7500 万枚（1941 年の売り上げ枚数は 1 億 2700 万枚）が、それらのうち、 4 分の 1 は高価なクラシック音楽であったという。そして、このような状況をふまえて、『タイム』誌は、オーケストラをもつアメリカの全 31 都市のデパートで、“ 音楽のための『タイム』 ” というキャンペーンを展開した。そこではまず、『タイム』誌の表紙のデザインに、バッハからガーシュインに至歴代の大作曲家の肖像画をはめ込み、大きなパネルが作成された。そして、そこに記事の見出しに見立てたフレーズが入るのだが、そのフレーズのなかの作曲家名が空欄になっている。つまり、それは穴埋めのクイズ形式になっているわけだが、その答えは、そのデパートの音楽関係の売り場に掲示される、という仕組みである。そして、この記事のなかで、次の 5 つのクイズが例として挙げられている [9] 。

（1）ヘルシンキの 5 小節：＿＿＿＿＿＿＿は、彼の〈Valse Triste 悲しいワルツ〉がラグタイム版で演奏されるのを 5 小節聴いたところで退出してしまった [10] 。

（2）ラプソディー・イン・ブルー：インテリな聴衆に酒場のブルースを提供することによって、＿＿＿＿＿＿＿はジャズから「淑女」を生み出し、高く評価された。

（3）禁止されていないが、演奏されない：第9交響曲の罪のために、公式に主張をあらため、＿＿＿＿＿＿は「ある者は自分のよろこびのために作曲するが、私は、国家に仕えるために作曲をする」と言った。
（4）Song of Love［邦題：愛の調べ］：＿＿＿＿＿＿の偉大なイ短調の協奏曲が、気の抜けた旋律を絞り出した。間もなく、その作曲家の人生を描いた映画が上演される。
（5）Full Moon and Empty Arms：＿＿＿＿＿＿のピアノ協奏曲第2番の甘ったるいバージョンの7種類の録音は、ジュークボックスに定番の稼ぎ頭になっている。

このキャンペーンは大きな反響をよび、教師たちからの要請に応えて、24のクイズ（解答つき）が無償で、各地の学校に提供されることとなったという。また、クリーヴランドでは、クリーヴランド管弦楽団のシーズン開幕にあわせて、ある会社が、街の広場に面したショーウィンドウを提供し、これらのパネルを掲示した。ポピュラー音楽を取り込んだクラシック音楽ビジネスの展開は、そうして人々の日常生活や、教育の場にも、入り込んでいったのである。

このような展開を経て、ラフマニノフのピアノ協奏曲第2番のレコードは、2つの版、つまりラフマニノフが15年前に録音したものと、ルービンシュタインによる録音で、1947年のシングルのクラシック・アルバムのベストセラーとなった。作曲されてから47年経ったこの作品は、ガーシュインの〈ラプソディー・イン・ブルー〉と1年を通じて競いあったが、最終的にはラフマニノフに軍パイがあがった。（Time 1948.01.12）
また、ラフマニノフに対する関心が高まったことを受けて、新しい展開もみられた。

ラフマニノフの死から5年が過ぎたが、先週、ユージン・オーマンディとフィラデルフィア管弦楽団が、アメリカにおけるラフマニノフの第1番初演を行った。それは、アメリカにおいて初めての、交響曲を取り上げるラジオ番組で放送された。［初演から］50年が過ぎ、その不協和音は、

もはや酷いものではないが、絶妙というわけでもなかった。第1番には、彼の後の作品にみられるような叙情性はあまりなく、むしろチャイコフスキーの〈1812年〉から大砲を抜いたもののように感じられる。(Time 1948.05.29)

このように、ピアノ協奏曲第2番に集中していた興味が、ラフマニノフの他の曲への関心へと広がっていくのだが、それに伴って、彼の作曲家としての控えめな見解が定着していったようである。

4. むすび

これら一連の記事から浮かび上がってくるのは、そもそもは、クラシック愛好家だけが享受していたであろうラフマニノフの音楽と、ポピュラー音楽しか聴かない人たちしか聴かなかったかも知れないラフマニノフのポピュラー音楽版が、シンクロしながら展開したことによって、ラフマニノフが、ジャンルを超えた存在となったということである。おそらく〈Full Moon and Empty Arms〉や、映画〈I've Always Loved You〉からラフマニノフに関心をもち、レコードを購入した人たちもいたに違いない。そしてまた、逆もしかり。いずれにしても、ラフマニノフが社会におけるポピュラリティを獲得していくプロセスは、同時に、ラフマニノフの作品が巨大化した音楽ビジネスにおける商品化されるプロセスでもあったとも言えよう。

［注］

[1] カーメン・キャヴァレロ Carmen Cavallaro (1913-1989) が、チャイコフスキーの幻想曲〈ロメオとジュリエット〉の旋律を借用して〈Our Love〉として演奏したものが、人気を博していた。

[2] チャールズ・ウィダー監督が1945年にアメリカで制作した、ショパンの伝記映画。

[3] Freddy Martin (1906 - 1983)

[4] José Iturbi (1895-1980) バスク地方出身の指揮者、チェンバロ奏者、ピアニスト。1940年代に、いくつかのハリウッド映画に出演している。

[5] Jane Powell (1929-) 1940年代から50年代にかけて活躍したアメリカの歌手、ダンサー、女優。

[6] 1916 年にアメリカで開発されたカラー映画の彩色技術。

[7] Ted Mossman（生没年不詳）

[8] Tin Pan Alley. 1890 年代から 1960 年代にかけて、ニューヨークを拠点とした音楽（楽譜）出版業のニックネーム。それらの会社が集まっていた一角の呼称に由来する。特定の音楽のスタイルを指す用語としても使われるようにもなった。

[9] クイズの答え：（1）シベリウス、（2）ガーシュイン、（3）ショスタコーヴィチ、（4）シューマン、（5）ラフマニノフ。

[10] ジャズ・ドラマーのジーン・クルーパ Gene Krupa (1909-1973) が、彼が率いるオーケストラで、この曲を録音している（コロンビア）。

参考文献

Grout, Donald J., Claude V. Palisca, and J. Peter Burkholder. 2014. *A History of Western Music*. 9th edition. New York: W. W. Norton.

Morgan, Robert P. 1991. *Twentieth-Century Music: A History of Musical Style in Modern Europeand America*. New York: W. W. Norton.

『タイム Time』誌の記事（いずれも、Time の公式ホームページ [http://www.time.com/time/] で参照した。2014 年 1 月 31 日参照。）

以下、発行日と、参照した記事の見出しを記す。

1943.04.05 Milestones

1944.02.07 Radio: Hoosegow Harmony

1944.07.10 Music: Tuners & Tuning

1944.10.02 Music: October Records

1945.02.05 Art: Philadelphia Goes Modern

1945.02.12 Music: Biggest Symphony Goes to Town

1945.04.02 Religion: Congregation v. Choir

1945.06.04 Music: New Records

1945.11.19 Music: Composer, Soviet-Style

1946.03.11 Radio: Git Gat Gittle

1946.08.05 Music: The New Records

1946.05.27 Music: Tchaikovsky in the Grove
1946.07.22 Radio: Program Preview
1946.04.05 Music: The New Records
1946.09.16a Music: Rash of Rachmaninoff
1946.09.16b Cinema: The New Pictures
1946.10.07 Music: New Records
1946.12.02 Music: Success in Kansas City
1946.12.09 Music: Chopin Marathon
1946.12.23 Army & Navy: What Comes Naturally
1947.01.06 Music: Hit Parade
1947.05.26 Man with Zal
1947.06.23 Music: Full Moon and Empty Arms
1947.10.13 Sour Notes
1947.11.03 A Letter from the Publisher
1948.01.12 Music: Those Lovable Russians
1948.03.29 Devilish Discords
1948.05.10 Music: Beethoven, Two to One
1948.05.10 Music: The Hard Way
1948.06.07 Music: Encore in Australia
1948.08.30 Letters

エピローグ

1946 年 9 月 16 日に『タイム』誌に掲載された記事の内容と同じようなことが起きた。それは、ロシアのソチで開催されていた第 22 回オリンピック冬期競技大会におけるフィギュア・スケート、女子シングル・フリーが行われた 2014 年 2 月 21 日未明から、同大会の閉会式が行われた 24 日（日本時間）にかけて、“ 日本国民で、ラフマニノフのピアノ協奏曲第 2 番を 1 度も聴かずに過ごした人は、ほとんどいないだろう ” ということである。それは、この曲を使った日本の浅田真央選手によるフリーの演技が幾度となく繰り返し放送されたからである。ここで使われたのは、ラフマニノフのピアノ協奏曲第 2 番の第 1 楽章を 4 分に短縮したものであった。この作品をよく知っている人々は、

音楽作品を切り刻んで断片を繋いだものに違和感を覚え、あるいは眉をひそめ、また、これが短縮版であることが気にならない、あるいは、そのことに気づかない人たちは、この短縮版をラフマニノフの作品として享受したはずである。いずれにしても、これからしばらくの間は、この演技のイメージから逃れてこの作品を聴くことはできないだろう。また、いわずもがな、CD の販売店では、このピアノ協奏曲第２番のセールが始まっている…。そして、このようにして、ラフマニノフの音楽の歴史は巡っていくのである。